

〔文学部主催講演会〕

韓国現代史と日本

——1945年から今日まで——

池 明 観

5月9日、文学部主催の春の講演会では、日本に滞在中であった池明観氏にお話をうかがった。池氏は、1924年生まれ。雑誌編集者を経て、1970年代には日本にいて、T.K生の名で「韓国からの通信」を雑誌『世界』に連載、韓国軍事政権を告発し続けた。民主化後に韓国に帰国、金大中大統領のブレーンとなって、日本と韓国との文化交流に一方ならず力を尽くされた。大変なご高齢にもかかわらず、波乱に富んだ韓国現代史と日本の関わりについて、熱のこもったお話をうかがうことができた。お話の内容は貴重であり、活字に残しておく意義があるものと考え、本学の国際文化学会の了承を得て、ここに掲載させていただく。なお、テープお越しは本学大学院生の奥野恭平君が行った。(梅山秀幸記)

【歴史家は希望を語る】

このようなお話をする機会を与えてくださいますありがとうございます。この年齢ですので、思ったことが十分に話せるかどうか心配しておりますが、ここに掲げられた演題で、韓国現代史と日本とのかかわりについて、考えていることをお話したいと思います。思っていることが十分喋ればいいのですが、わかりにくいところがあれば、どうかお許しください。

キーワード：韓国、日韓条約、金大中、教科書問題

この頃は何か話すようにといわれますと、一時間もの間、私自身の体力が大丈夫かなと心配しながら喋るわけですが、年寄りの回顧談といえますか、自伝的なことを絡めながらよく話をいたします。今日もそうなると思いますが、私は日本に二十年半くらい住んでいましたので、その後、韓国に帰ってからはしばらく韓国の状況になじめずに、ずいぶん苦勞しました。しかし、もともと自分の生まれ育った国ですから、韓国の生活にもうすっかり馴染んでしまって、今度は逆に、六ヶ月間くらい日本に滞在しているのですが、日本で生活するのがきつく感じられます。だから、早く韓国に帰りたいと思っているのですが、もう一週間もすれば帰れると思って、今、いろいろと帰国の準備をしているところです。

今日は、韓国の歴史に対する一種の解釈を試みるわけですが、それと同時に未来への展望をも語ってみたいと思います。そこで、まず思い出しますのは、今の私の年齢とほとんど同じ年で、敗戦したドイツのことを書いたマイネッケという歴史家のことです。マイネッケの書いた本はソウルに置いて来ましたので、日本に来てあらためて買い求めましたが、この『ドイツの悲劇』という本です。皆さんもいつかお暇なときにお読みになったらいいかと思います。

マイネッケはドイツが敗戦した当時、自分が疎開していた農家の台所で、目がよく見えないものですから、ずいぶん苦勞しながら、彼の三大名著の一つであるこの本を、古いノートに書き上げたそうです。八十歳を越えていたのですが、そのいちばん最後のところでこういっています。

「われわれのドイツの国家は打ち碎かれており、広大なドイツの土地はわれわれから失われている。外国支配はわれわれにとって長いあいだの運命になっている。ドイツ人の精神を救う仕事は、うまくゆくだろうか。ドイツの精神は、その歴史のなかで、いまだかつてこのような負荷試験に耐えねばならぬことはなかった」

今まで経験したことのない苦難をドイツ人は経験することになるのですが、しかし、最後の最後に、彼はこう言って結んでいます。

「われわれがそのときしかし、永遠にして神的なものの最高の領域を仰ぎみるならば、『汝らよ、希望をもて』という声が、そこからわれわれのほうへ響いてくるのである」

これが最後のことばです。絶望のどん底において、彼には「希望を持って」という声が聞こえてくるという。これを、神の声といってもいいでしょうが、あるいは歴史家に聞こえてくる内面の声といってもいいのではないかと思います。歴史家は希望を語るのであって、絶望を語るのは歴史家ではない。だから今、ここで古い歴史を考える、あるいは、日韓関係の歴史を考えてもいいし、1945年以降の韓国の現代史を考えてみてもいいのですが、そこで、しかし、絶望するのではなく、希望を語るべきである。未来の方に希望が見えてくるという立場に立つのが歴史家である。そのように彼はいうわけです。今日、私たちはよく絶望を語り、未来に対して希望がないかのように思っているのですが、日韓両国の歴史を振り返りながら、私はやはり希望を語りたいと思うのです。

Ⅰ 1945年—敗戦、あるいは解放—

いくつかの段階に分けて考えていきたいのですが、まず第一に、1945年ですね。日本の終戦のとき、あるいは敗戦のとき、一方では、そのときが韓国人にとって、朝鮮人にとって、解放の日であったわけです。これからは日本の束縛から離れて自主的に歩んでいけるという解放の日でした。一つ考えていただきたいのですが、一方には敗戦だと考えている国民がいて、もう一方には、いや、われわれは解放されたのだ、束縛から解放されて新しい歴史がこれから始まるのだという国民がいる。そのときの顔つき、目つきを私は思い出すことができますが、日本では敗戦を受容しなければな

らない、そう考えたのが大部分の人だったろうと思います。日本は欧米にくらべて、やはり力が弱いから、敗北したのである。これからどうすればいいか、まあ力をつけるしかないと考えたにちがいない。力がないから負けたのだというところから日本が出発するとすれば、韓国、あるいは朝鮮はどのような出発の仕方をしたのでしょうか。

私はそのとき二十歳を少し過ぎていましたが、どう考えたかという、歴史において正義はやはり勝つものだと考えた。正義が勝つ、われわれを今まで束縛していた日本は敗北して行って、正義の側に立った側として、われわれはこれから歴史を作っていくんだと考えました。非常に元気付いたといいますか、敗北的な心情ではなく、勝利したという高揚感に駆られていました。そういう相反する心情をもって、日韓両国民は1945年以降の歴史を歩んでくるわけです。1945年以降の日本の歴史をいろいろ考えていたただきたいと思いますが、そういう敗北感の中から、日本は蘇ってくる。蘇生しながら自信をつけてくることになります。その一方で、正義は勝利する、われわれは勝利した側に立っているという心情から、韓国人はどうなっていったのでしょうか。韓国人は果たして正義は勝利したのであろうか、この人生というのは、われわれが期待したような人生ではないではないか、われわれが期待した歴史はこういうものではなかったはずだと思うようになってきます。南北は分断し、それから戦争をする。そういう悲惨な歴史が始まったというので、なんといいましょうか、歴史に裏切られたという思いを抱くようになる。それが戦後の朝鮮史であったと、私は解釈いたしますが、こういうことを前提としてお聞きくださればと思います。

このようなことを話題にして恐縮ですが、日本統治時代に、韓国あるいは朝鮮は、海外に臨時政府というものを立てました。上海にですが、後に、それが上海にいられなくなると、今度は重慶の方に移りましたが、その臨時政府が1941年2月9日に対日宣戦声明書というものを出すのです。われ

韓国現代史と日本

われには力はないけれども、やはり日本に向かって宣戦布告をして戦うんだという、そうした姿勢を示すために声明を出すわけです。その声明の第三番目の項目にこういうことばがあります。失礼ですが読ませていただきたいと思います。

「韓国，中国及び西太平洋から倭寇を完全に駆逐するために，最後の勝利を勝ちとるまで血戦を行う」

ここでは日本に対して「倭寇」ということばを使っているんですね。「倭寇」—日本を完全に駆逐するために，最後の勝利を勝ち取るまで，死の戦いを行うと声明しているわけです。このようなことを1941年に言っているのですが，やがて4，5年して朝鮮は解放されます。日本の支配からは解放された。しかし，すぐに南北朝鮮に分かれてしまうという状況になるのです。この1945年における朝鮮すなわち韓国，私はこれから主に韓国のことだけを語りますが，韓国人の心情の中には，振り返って考えてみますと，二つの傾向があった，日本との関係において二つの心情があったと思うのです。一つは何かというと，建て前としての「反日」です。日本に反対し，日本に抵抗し，日本がよくなることを喜ばない心情。そういったものが，もちろん韓国人の間にはあるわけですね。しかしもう一方で，これは本音といいましょうか，これから日本の経済は発展していくわけですが，韓国はそれに依存しなければならないという体質的なものがある。これについて，もうすこし説明しますと，日本の支配化の時代に，朝鮮の経済というのは植民地経済になってしまった。それは，本国である日本に依存しないでは，立っていかれない経済であって，その構造は変っていない。だから，日本に対して建て前としては反日だけど，本音としては日本に何かと依存しながら生きていかざるを得ないというわけです。このような差し迫った要求の中に置かれているのが，1945年以降における朝鮮の姿であった。そのように申し上げていただろうと思います。

【継続する植民地経済】

植民地経済というのはどういうものかといいますと、私は『日韓関係史研究』（新教出版社 1999年）という本の中で、このように書いています。

「機械は日本製であり、製品の完成のためには日本の企業の力を借りなければならぬ。かつて重要な技術者はそのほとんどが日本人であった。植民地支配下では機械の修理にも日本に依存し、生産過程の一部を朝鮮で行うだけであったために『一貫作業』が困難であり、水産物も鉱産物も日本に市場を求めなければならなかった」

戦後においてもこの産業構造はどうすることもできないわけですね。日本の残した韓国の工場の中で製品を作っても途中までで、これを完成するためには日本に送らなければならない。日本に送れないとすれば、何らかの形において日本の援助を、あるいは日本との提携を持たなければならない。そういった状況であったのです。それだけではなく、工場の技術者の90%が、実は日本人でした。朝鮮人は10%でしかなかった。しかも、その10%すら南北に分かれているという状況になってしまったわけです。機械が故障すれば修理しなくてはなりません、その修理も、日本製であるから、日本に行って修理しなければならない。それをどうするかという問題もあります。生産過程の一部はどうしても日本に行くしかない。完成品を作るためには日本に行かなければならず、朝鮮内で一貫作業によってこれを完成することはできない。それだけではなく、朝鮮半島の周辺で水産物が取れる。あるいは国内において鉱産物、マイニングの方ですが、山でいろいろ鉱物が取れるわけですが、それら鉱産物も水産物も市場は日本であるということです。国内市場ではなくて日本の市場に売らなければ、生きていられない。これが言わば、日本の近代化過程の中において生きてきた韓国のリアルな姿でした。

戦後において、朝鮮人が、あるいは韓国人が日本に対して、敵対感情、

韓国現代史と日本

憎しみの感情を持っていた。それが、これからどう変遷していくのか。そういうことも、両国の関係のために見ていかなければならないのですが、実質的には日本に経済を依存しなければならない。その依存がまた、日本の復興を助けることではないか。日本はどんどんと復興して行って、われわれとのギャップがさらに大きくなっていく。これを一体どうしたらいいのかというのがジレンマでした。日本に依存し、日本のものを買いながら、それで戦後の経済復興をしようとすれば、日本はそれですますます発展して行って、そして、より支配的な位置に立つであろう。だから、こういうことになっていきます。日本に経済的に依存すれば依存するほど、心理的にはますます反日的になっていくという、アンビバレントな心情。日本との経済関係が深くなればなるほど、日本に対する反日的な心情は返って深められていくというような矛盾の中に陥っていった。戦後の韓国史を読み直しながら、私はそのように思っているのです。

【朝鮮戦争の経験】

そういったところに、1950年、南北の間に朝鮮戦争が起こります。それで、これは極端な言い方かもしれませんが、その時、武器はアメリカのものであるけれども、その他の日常品は日本の製品です。自動車も日産の自動車を通る。韓国は何も作っていない。戦争している間、日本は非武装の国で武器は作れないから、武器はアメリカのものであっても、その他のすべてのものは日本製でした。私はそのとき戦争に行っていましたが、行ってみると、C-レーションと言ってコンバットレーションですね、行軍中の食事ですが、山の中に入って戦争するとすれば、ご飯を炊くことはできませんですから、レーションが与えられるわけですが、中は開けてみるとみんな日本製です。それでよく朝鮮戦争を通して日本は復興した、戦後復興、リバイバルしたのだといいますが、そういわざるを得ないぐらいに日本製

品が入ってきたわけです。1950年に朝鮮戦争が起こって約3年にして、1953年7月29日に、南北のあいだに休戦協定が結ばれるのですが、日本に対して非常に対立感情をもちながらも、一方では日本の助けなしには生きられないというジレンマに加えて、この悲惨な南北の戦争を梃子にして日本の復興がさらに加速したという感情がぬぐえません。

それが戦後の朝鮮であったわけですが、もう一つ、日本にいる在日韓国人の問題があります。これにみんな悩むわけですね。何故かという、朝鮮は第二次大戦が終了するやいなや、南北に分かれるわけでしょう。日本に労働者として来ていた人たちが、朝鮮に帰りたと思ったのですが、南北が分断している状況の中では帰ることができない、あるいは、どこに帰っていいのかわからない。その上、南北が戦争になる。そこで、日本に多くの朝鮮人を残しておかなければならなくなった。そのために、残された朝鮮人は何らかの意味において苦しまなければならなかった。こういう状況が、戦後における、そしてそれに続く1950年代における、朝鮮の状況であったわけです。

II 日韓条約の締結

その次の段階ですが、それを日韓条約のときに求めたいと思います。1965年、日本と韓国の間には条約が結ばれて、国交が正常化します。戦後20年間たっても絶たれていた日韓の関係が、外交的にふたたび結び付けられることになるわけですね。1951年、朝鮮戦争の起こったその翌年、戦争が起こって半年くらいたってからのことですが、アメリカのすすめで日韓の間に予備会談が行われる。国交が回復されなければならない。アメリカは、極東政策の上においても、日本と韓国の両国はなんらかの結びつきを取り戻さなくてはならないと思ったわけで、それで1951年1月20日に日韓予備会談が東京で開かれるわけです。そして翌年の52年には第一次日韓会談が

韓国現代史と日本

開かれます。今度は正式の会議で、両国の関係をどのように取り戻すのが話し合われるわけですが、ようやく1965年の12月18日になって、日韓条約が成立して、批准書を交換することになります。話し合いは難航して、話し合いを始めてから実に何年たっていますでしょうか、14年もの歳月が経って、ようやく両国は外交関係を持つようになるわけです。

そのとき、今でも私は思うのですが、日韓両国の政治的指導者たちは、「そうだ、かつては支配し、支配されたけれども、戦後においてはわれわれは手を握ろう。そして、いっしょになって東アジアの将来をながめてみようではないか」—どうして、そういう気持ちにはなれなかったのでしょうか。残念ながら、どちらの国の政治家も、そういう気持ちにはなれなかったみたいですね。アメリカが背後で、冷戦体制のもとで、東アジアにおいて日本と韓国がこんなに仲が悪くては困る、その関係を修復させなければならぬと考えて、たいへん強い圧力を両国にかけて、これを進めたのです。だから、日本と韓国の両国のイニシアチブによって新しい関係が樹立されていくのではなかったのです。そういう政治勢力は両方とも存在しない。自分の国のことを考えるだけで精一杯であるという状態で、アメリカの強力な後押しによって、新たな関係が無理やり出来上がってしまう。アメリカは、冷戦体制の中で自分の立場を強化するために、日本と韓国を利用しようとしたに過ぎないのですが、その中で、韓国経済の日本経済への依存度はますますどうにもならないような状況に入っていく。そういった戦後の体制がここに樹立されるわけです。そこで、韓国はますます建て前的には日本に対して批判的になる。その一方で、本音では日本との間をうまく運んで、何とか自分たちの経済を立て直さなければならないという時代になるわけです。

このときは日韓条約によって、経済協力という名のもとですが、賠償という形で韓国にお金を支払われる。3億ドルを無償で、つまり、ただで韓

国にやる。それから、後から返すお金として、有償で2億ドルを韓国に貸してやる、そういうことが取り決められるわけです。そうした交渉の最終段階に入るときが1961年ころでして、韓国はすでに軍事政権に入っていました。軍隊が政権を握っているわけですね。軍事政権がどうして日韓関係を早く回復させなければならないと考えたかと申しますと、一つには、国民を統治していく上で、お金が必要である。自分も金持ちになりたい。それから国民の前に近代化というスローガンを掲げている以上、それを実現するために、国民の目に軍事政権は何かをやっているのだというところを見せなければならない。そのためには、日本と手を握ることによって、近代化を成し遂げるのが何よりであると切実に思ったわけです。

すると、軍事政権に批判的な多くの国民がどう考えるかといいますと、この軍事政権は日本によってサポートされている。経済関係によってサポートされている。すると、軍事政権に反対するとなれば、当然、「反日」にならざるをえない。反軍事政権は「反日」になってしまうのです。逆に、軍事政権は自分たちの力をつけるために、日本の援助をますます必要とするというような状態になっていくわけです。ちょうどそのころ、1965年に日韓条約が締結されるころのことを、私はまざまざと思い起こすことができます。日韓会談に反対する学生、国民の勢力がデモをして、ソウル市内は毎日のように催涙ガスで満たされてしまいます。学校でも、毎日のように大騒ぎでした。そして、目が開けられないほど、街中を催涙ガスが瀰漫しているという状態になっていました。現在の日本の若い皆さんに理解できるかどうかわかりませんが、国民がますますそのように激しく抵抗する背後には、1960年、学生の手によって政府を倒したという経験があります。この軍事政権もわれわれが抵抗すれば倒れるんだという自信があるわけです。それで、ますます軍事政権との戦いを展開したといえます。しかし、そのようなことを繰り返しながらも、軍事政権は、20年、いや30年近くも

続いていったわけです。

【1965年 初めての日本】

私自身はといえば、自分の経験を語るのは恐縮ですが、1965年の12月に初めて日本に来ました。日本に来て、そうですね、この大阪あたりに来たときのことだったと記憶しています。駅の待合室で座ってテレビを見ていたら、日本の国会で日韓条約が批准されたというニュースが出てきたんですよ。私はそれにもう釘付けになって、「ああ、ついに日韓条約は批准されたのか」と、深い感慨をもってニュースを見ているのに、周囲にいる日本人はといえば、まったく誰もそれに対して気を止めようとしません。日韓関係がどうなろうと、一般の日本人はまったく無関心である。私一人だけが、ついに日韓条約は批准されて、これから日韓関係はどうなることかと考える。それが韓国においては重大な外交的要因、近代化の過程における重要な要因にならざるを得ないということを、ただ一人で考え込んでいたわけです。そして、そのとき新幹線に乗って東京と大阪を往復したのですが、私の頭の中で大きな変化が起こったのです。それがどういうものかと簡単に申しますと、それまでは、私の発想の中において日本は不在であった。戦前はもちろん違いますが、戦後は日本はもう関係ないんだと思っていました。日本不在であった。そういう考え方が、日本に来てみて、やはり日本を前提として考えなければならないと思うようになったのです。

日本との関係を切実なものとして考えながら、これからの韓国問題を考えなければならないという、発想の転換といえましょうか、そういうものが私の中で起こっていた。新幹線に乗ってたいへんなスピードで東京と大阪を往復する。これは想像すらできなかったことです。さらに、その沿線の日本の工業化された姿、1965年のことですが、その姿を見て、私は自分の今までの生き方に対して、ある種の疑問を持つようになったといってい

いかもかもしれません。歴史への反省が起こった。何故、敗戦国なのに、日本はこのように栄えていて、逆に、韓国は南北が戦争をして、それこそ廢墟になり、ずっと日本に対しては敵対意識をもち続けながら惨めに生きていかなければならないのか。そして支配層は軍事政権ですから、北に対する敵意をあおりながら、反共、反共と繰り返して叫んでいる。北は敵だから、戦うんだと言っている。それにどうしても引きずられていかざるを得ない。しかし、その一方で、韓国は民主化されなければならないというので、若い世代を中心に、民主化勢力が興って軍事政権と対立する。そのために韓国は毎日のように騒乱の中にある、戦いの中、争いの中にあるということ思い出したのです。私は心の中で、日本はこれほど栄えているときに、韓国は今まで何をしてきたのだろうか、このままでいいのだろうか、そのときしきりに自問自答せざるをえなかったのです。韓国が民主化されるのは1988年頃からだといっていると思いますが、そこまでにはまだ至っていない。東アジアの状況の中で韓国の運命というのを、密かに考えざるをえなかったのです。

【朝鮮半島の宿命】

韓国の運命、そうですね、地理的に朝鮮は半島です。半島の持つ運命です。陸続きに中国、大陸勢力がある。そして、海を少し隔てては、日本が存在するし、その背後にはまたアメリカがあることとなります。大陸勢力と海洋勢力が衝突するという運命の中にこの半島の国は置かれているのだと考えざるを得ない。歴史をさかのぼっても、16世紀末に、皆さんもよくご存じのように、文禄・慶長の役がありますね。日本が朝鮮半島に押し寄せてくる。そして、そこに明の軍隊までもやってきて、朝鮮で戦争をすることとなります。後に徳川幕府になって、平穩に鎮まるのですが、これがまた、近代において再現されるという状況になったのだと思わざるを得な

いのですね。すると、東アジアの平和ということを考えなければならない。東アジアが平和でなければ、朝鮮半島はけっして平和になれないという命題がある。これはもう絶対命題といっていいかと思います。大陸勢力と海洋勢力がぶつかることによって、南北が分断されていましたが、東アジア全体が平和になってこそ朝鮮半島は平和になることができる。もし日中間の紛争が起これば、朝鮮は犠牲にならざるをえない。だから朝鮮半島は、日本とその背後にあるアメリカまでも含めての海洋勢力、そして中国、それからその背後にあるロシなどの大陸勢力を含めて、すべての国の間に平和が成立しなければ、平和は望めない。そうでなければ、日露戦争のときもそうであったし、その後の第二次世界大戦においてもそうであったように、朝鮮は紛争の中に巻き込まれ、ついには、南北が分断されてしまう。だから、朝鮮半島こそ東アジアの平和を念願としなければならない。これは自分の生存のためです。東アジアがふたたび戦乱の中に入っていくようなことを経験しないために、東アジアに平和が生い茂るような時代をわれわれは作っていかなければならない。平和でなければ一番の犠牲になるのは朝鮮半島であるから、平和のために韓国がどのような役割をなすのか、それが重大な問題であると考えざるを得ないわけです。どうすれば東アジアが平和になるのか。日本は島国だから、多少体力に問題があっても生き延びられるかもしれない。しかし日本すら、今日においてはそれもできないような時代になってきています。

【日韓条約反対運動を振り返って】

私は日本に20年以上いて、それから1993年に韓国に帰っていったのですが、その前年に、もう民主化される過程にあったのですが、2、3日間、韓国に帰ってみて、私が帰国しても身に危険はないかとテストをしてみたのです。そして、行ってみると、いろいろ知り合いに付き添ってもらった

のですが、まあ無事でした。これなら、もう帰国してもかまわないということになりましたが、そのときにですね、私の頭の中には20年前の韓国があったわけです。ソウルの都市のイメージがあったのです。それが、まったく裏切られて、20年後の近代化されたアパートがものすごく建っている。私の中では、20年間で欠落しているのです。ソウルには漢江という大きな川が流れていますが、その漢江の南の繁栄を、私は全然知らないわけです。私がいた時分には、そこは畑や田圃に過ぎなかったのです。そこが近代的な美しい町に変わっているのを眺めながら、私は、1960年代に日韓条約に反対する運動をした時の、あのときの論理、あのときの考え方ではこの時代を理解することできないと思うようになりました。古い考え方に縛られていては、新しく出来上がった、新しく台頭してくる現象を理解することはできないのだ。だから、古い考え方を捨てて、新しい時代を解釈し、新しい時代を生きていく思想をいかに生み出すか、それを考えなければならぬ。一種の衝撃を受けながら、私はそう考えたわけです。それで、韓国に帰って、「日韓条約批判の論理に関する実証的研究」という論文を書いたのです。『日韓関係史研究』という本の中に収めている論文です。

その論文の趣旨というのは、日韓条約批判の論理、日韓条約を批判しながら、日本が入ってくるから、日本に敵対しなければならないというようなことを盛んに言ってきたけれども、その論理ではだめなのだということです。二十数年前には、日韓条約を反対し、5億ドルの経済協力で日本は韓国をまた植民地化しようとしているというような論理を展開したけれども、それは今や通用しない。日本との関係は非常に変わってきている。私はできるだけ実証的にそれを研究しようと考えたわけですが、データを見てもみると、ほんとうに驚くべきことが起こっていた。その論文を書いたのは1994年頃のことですが、日本と韓国との間の貿易関係が、その前の1965年日韓条約が提携されたところに比べて、韓国から輸出するのが308倍、日

韓国現代史と日本

本から輸入するのが152倍、そのように変化しているのです。もちろん日本に対して赤字を繰り返しているわけで、その1994、5年当時、累積貿易赤字は943億5600万ドルにも達していました。それが問題でして、最近でも日本と韓国とのあいだに、年間100億ドルを超える貿易赤字が韓国の方にありますが、今はあんまり問題にしなくなっている。それは、対中国貿易で黒字が出てくる、他の国との貿易でいっぱい黒字になってきているから、問題にはならなくなっていますが、当時はこれが大きな問題でありました。ただ、そういう問題はあるけれども、経済のパイが大きくなったということは否定することのできない事実であったわけです。

それから、もうひとつ面白いのは、詳しい数字は省きますが、造船業が1979年ころから、日韓条約ができてまだ15年も経っていない、そのころから、造船の受注量において、日本が世界第一位、韓国は世界第二になっています。最近では、韓国が上に立っているみたいですが、そのように状況が変わってきている。それから、水産業のほうを見ますと、これもその背景を申し上げようとすればきりがありませんが、日本と条約を結んで国交が正常化すれば、日本が韓国の漁場をすっかり荒らして、韓国は大変だということで、反対したわけです。しかしそうではなかった。どうなったかと申しますと、日韓条約が締結された1965年に、韓国側が漁獲したのが61万6000トンぐらい。それが6年後の71年には、107万4000トンに上っているのです。そして、94年には347万7000トンになって、65年の日韓条約ができたときの5.5倍にふくれ上っていくんです。こういう数字を示しながら、私は、1965年前後において日韓条約を反対した論理が今日においては成立しないと結論づけたのです。自分が反対した側に立っていたから、自分の誤りを歴史によって是正していかなければならない、こういうように考えたのです。

このとき書きました論文の最後のことばを読みますと、そのときの私の

苦渋が現われていると思うのですが、あまりはっきりと書くと親日派だといわれるかもしれないし、それだからといって、これを隠し立てするのもいけない。どうともできないので迷って、一番最後に次のように書いたのです。

「1965年以來の歴史を振り返って、日韓条約と日韓関係についてどのような評価を下ろすかというのは、今後も長く問題にされる大きな歴史学的、思想史的課題であるといわなければならない」

このようにまずいっておいて、

「ただ一言だけつけ加えるべきことは、それから30年間の歴史が1965年当時の人々の考えをはるかに越えるものであったということであろう。そしてこれから30年間の日韓関係の歴史もまたそうである、あるいはそれ以上であるにちがいないであろうということである。そのような歴史認識こそ、この30年間の歴史をかえりみて、われわれがたどりついた歴史的知恵であるといいたい」

これがこの論文の最後の締めくくりです。われわれは日韓会談に反対しながら戦った。そして未来がこうなるから、日本が入ってきたら困るんだ、といってきたのだけれども、実際は違っていた。それが過去の30年間であるとするならば、これからの30年間は、両国のあいだにどういうことが起こるか、われわれの想像をはるかに超えた歴史が実現するに違いない。このようにわれわれは歴史の前に謙虚であるべきであると言わざるを得なかったわけです。それで、このときから私のはっきりと思うようになったことは何かというと、過去とは違う、過去の歴史においては大国と交わることによって、必ず収奪される、搾取されるというように思っていたけれども、今は違うのだということです。お互い国が交わるということはプラスであって、交わらなければならない。それは収奪ではなく、自由な歴史を展開させながら、お互いの社会を豊かにならしめるものである、こういう

韓国現代史と日本

発想でなければならないと考えるようになったのです。日本がくることは、われわれが搾取されることであるという考え方は過去の考え方である。これからは日本と交わることによって、日本も豊かになり、われわれも豊かになるのだという発想に転換しなければ、21世紀を生きていけない。そのような考えを持つに至ったわけです。

【近視眼的な政治家たち】

私は、最近、政治家と歴史家というものを考えるのですけどね。政治家はほんとうにつまんないですよ。政治家のビジョンというのは、大統領でせいぜい5年、自分の任期のことしか考えていない。ところが、歴史家はそのように5年の単位で考えるわけにはいかない。政治家の場合はイメージネーション、想像力が実に短いスパンでしか働かない。その想像力の働かない政治家に向けて、これからの長い日韓関係はどうあるべきかを、われわれは示すのでなければならない。すべてを政治家に任せっきりであってはならないと思うのです。知識人も、あるいは歴史家も、黙っているというのは非常に危ないと思うんですよ。あんな人たちに任せていられますか。現在、私は韓国の政府に対しても、その政府が成立する過程において応援した人間であるにもかかわらず、非常に批判的です。日本の政治家も、あるいは中国の政治家も、あのようなショートサイトな、つまり近視眼的な見方でアジアを判断してはならないと思います。アジアの新しい未来を、ずっと向こうの未来を見つめながら語れるような政治家がいなければならぬのですが、それを期待できないから、歴史家が、あるいは市民がしっかりしなければならぬと思うわけです。

III T. K生の時代

三番目に、今度は、私が『韓国からの通信』を書いた時代、15年ものあ

いだ、日本のマスメディアを汚したわけでありませうけれども、そのことについてお話ししたいと思います。先ほど、私は65年に初めて日本に来たという話をしました。あの当時、韓国は灯火管制が行われていて、12時以降になるともう誰も外には出られない。特別な許可書なしには外に出られなかったのです。だから、お酒を飲んでいた人などは、12時近くなると、慌てふためいて家に走って帰るというような時代でしたが、ところが、東京に来てみると、12時以降にも明かりが灯っている。これはもう、神秘の世界に入って来たような感じでした。感動してしまって、眠れないのですよ。こんなに煌煌と明かりが点っているのに寝られるものかというような気持ちになるぐらいに、まあ、衝撃を受けました。それと同時に、やはり日本に学ばなければならない、韓国のように南北対立のためとって、泥試合を続けることをなんとかやめなければならないと思うようになりました。反対者、抵抗する人を、簡単に投獄してしまう、そういうことであってはならない。私は67年から68年にかけて、アメリカに留学しますけれども、そのとき、韓国人の頭の中は、日本に対しては敵対意識を持ちながら、一方ではアメリカが何もかもわれわれに恵んでくれるというような幻想に囚われていたのです。それは朝鮮戦争のときにアメリカ軍が助けてくれたということから自然ときたものでしょう。ずっとアメリカが、生活物資とか、救護品とかでいろいろと助けてくれるから、そういうビジョンをもってきましたけれども、67年か68年にかけてアメリカに留学して感じたのは、アメリカは世界の100以上の国の中の一つとしてしか韓国を見ていないということでした。当たり前といえば当たり前のことなのですが、韓国はアメリカがまるで親でもあるかのように考えていた。そのようなパターンリズムでもって見てはならないし、アジア同士がこれからどう生きていけばいいのかを、懸命に探していかなければならないという考えを持ってアメリカから帰ってきたのです。それから、1965年に日本で先に述べたようなシ

韓国現代史と日本

ショックを受けますから、日本に来て勉強がしたい。韓国における政治的な闘争はしばらくおいて、勉強がしたいと思って、72年の10月の末に日本に勉強に来たわけです。するとですね、一年もたたない、73年の8月8日に、金大中さんが日本に来ていて、ほとんど亡命の状態であったのですが、拉致されていくという事件が起こります。これにはたいへんまごついて、どうすればいいのか分からなくなりましたが。軍事政権によって拉致されて、彼は向こうで受難の時代を迎えることになる。ほとんど殺されるころだったのが、詳しいことは申しませんが、何かのきっかけで彼を生かしておかざるをえなくなって、韓国に連れて行かれたわけです。そのときから私に、実は、なんといいますか、一つの革命的な契機が訪れてきます。それはどういうことかと申しますと、日本に来るときは、しっかりした勉強をしておこう、こういう時代にこそ勉強を蔑ろにするのではなく、かえって集中して勉強しよう、それが次の時代のための準備になるというような考え方でした。それが、金大中が拉致されると、この状況の中をどう生きていくのかを考えざるをえなくなった。たいへん迷ったのですが、周辺から、いろいろと要求されました。そのとき、日本にいる友人たちが、「お前も韓国に帰ったら牢屋に行くんだから、当分、この日本にいる」というようにいってくれました。その代わりに、日本にいながら、韓国の状況を何とか助けるために運動をしてほしいというのです。私は家族をほったらかしたまま東京にいて、ちょうどその少し前から、岩波の『世界』に「韓国からの通信」を書き始めていたので、それを書き続けながら、韓国の民主化のために戦っていこうと考えたわけです。そのようなことで、私の初心である学問をするということは当分、いや当分じゃない、永遠になげうってしまったと言えるでしょう。

そのような経緯で「韓国からの通信」を満15年書いたわけですが、今回の日本滞在では、その当時の歴史をもう一回書き直してみたいと思って来

たのです。国際日本文化研究センターに招かれて、半年日本に滞在して、もうすぐ帰りますけれども、私自身の書いた「韓国からの通信」はその時代をどう見ているか。そしてその時代の日本の代表的なジャーナリズムは日本を、あるいは韓国を、どのように見ているか、また日韓関係はどうあるべきものと見ているのか。それから、もう一つ、当時、軍事政権の支配下にあった韓国の新聞はどのように見ているか。この三つを重ねることによって、たぶんその時代について多少解明することができるだろうと思ひまして、その作業をしているのです。ロシア革命の前夜にパリに亡命したゲルツェンという人がいます。たいへん偉大な文芸批評家だといっていると思います。『ロシアにおける革命思想の発達について』という本が岩波文庫に入っていますが、小説も書いていて、『ドクトル・クルーポフ』という作品の中で、「歴史とは一熱病である」というんです。革命的な時代の歴史というものを考えたら、熱病であったというしかない。これは悪いの、これはいいの、というような判断をそのときにするとしても、後から冷静に見直してみると、おかしいこともある。それで、歴史とは狂人、狂った人の自叙伝である。狂った人が自分の自叙伝を書くのが歴史である、というようなことをいっているのですが、私は自分の「韓国からの通信」、15年のあいだ、400字の原稿用紙で1万枚を超える量を書き続けましたが、これを読み返しながらか、これも一種の狂人の書ではないかと思ったのです。あの時、日本にいながら韓国の状況をながめて、憂いがもう天を突くような状態でありましたから、やはりこれは狂っていると思いながら、やっとのことで読み終えたのです。韓国にいたなら、過去のああいうものは、とても読み直せません。日本に来て、研究課題だということで、あらためて客観的に読もうとしたわけです。

【ぶれなくなった日本の新聞】

そしてその当時の、日本の新聞がどうであったか。新聞をずっと読み続けているわけですが、皆さんの中でこれから研究される方がいらっしゃれば、私よりもっと詳しく読んでいただきたいと思います。一つの重要な研究課題として揚げておきますが、新聞を読む中でわかったことは、日本のジャーナリズムがアジアに対して非常な関心を持って、いわばアジア復帰をするのは、私は70年代ごろではなかったかと思うんです。日本が復興するためには欧米の方に向かわなければならない、それで、できるだけアジアと関係したくない。過去に日本が侵略したことで非難を受けているアジアからは遠のきたい。しかし、そうはいってられない状況がある。日本の地政学的な位置から、どうしてもアジアへと向かわざるをえないようになるのは、70年代の初期からのことではないかと思います。朝日新聞の例を挙げますと、朝日の社説が非常にいい内容で、アジアの人々から受け入れられるようになるのは、私が今まで調べたかぎりでは、70年代、金大中が拉致される73年ころからであるように思えます。金大中拉致事件については非常にいい社説がいくつもあります。時代の流れの中で、ヨーロッパがヨーロッパ共同体へ向かうように、ある時代において、日本のジャーナリズムがアジアへの関心をもつようになります。もちろん、アジアを批判することもあります。それはただ単に非難するためではなくて、アジアのことをともに憂えるという、ものの書き方に変わっていく。これは日本にとって非常に大事なことでなかろうかと私は思うのです。

金大中さんが拉致された時代のことはそのくらいにしておきますが、1980年5月、韓国では軍事政権によってたいへんな事態が引き起こされます。光州において何百人もの人が殺される、そういう悲惨な事態になって、金大中さんが再び投獄されるわけです。そういう時代においても朝日新聞の目は、決して曇ってはいないと思うのです。1980年代になって、朝鮮半

島に向ける関心というのが日本で非常に強くなるのです。これは、私が今やっていることですが、日本の新聞全部を見ることはできないので、朝日新聞を中心にしているのですが、73年から88年までの朝日新聞の、もちろん他の記事も読みますが、社説を中心として見てですね、驚くことには、今の韓国人の日本に対して批判的な目で見ても、その社説には一つも間違いがないという結論に達しました。もちろん、取り扱わない事柄もあるのでありますが、新聞に活字となったかぎりにおいては非難すべきことがない。これは驚くべきことだと思います。日本のジャーナリズムがしっかりとアジアに向かい始めたのは、1970年代のころからで、80年代になると、論評や議論は非常に正確なものになる。そういう段階にまで日本が入ってきた、あるいは発展している、成熟しているんだということですね。これまでの私の研究では、そうなります。

【金大中大統領とともに一政治、そして教科書】

私ができるようにジャーナリズムについていっているのは、一つ問題を提起したいからなのです。ジャーナリズムはそうだとすると、それでは、日本の政府はどうか、あるいは日本の歴史教科書はどうか、そういう問題がある。日本の歴史教科書はまた古い方向に帰ろうとしているのではないか。日本の政府はアジアと対話をしようという方向に背を向けているのではないか。ジャーナリズムがアジアに対して強く関心をもつようになったとすれば、歴史教科書も当然そうでなければならない。日本のジャーナリズムがアジアのジャーナリズムに対して指導的な役割を果たすことができるのなら、日本の教科書だってアジアに対して指導的役割を果たすことができるのではないか。これがアジアの行くべき道である、過去にはこうであったが、いや、むしろこうであったから、これからはこういかなければならないと、どうして教科書で堂々と言えないのか。アジアの諸国がま

韓国現代史と日本

だ自国の狭い利益のみを追求していて、まだそういう方向に行っていないとすれば、ジャーナリズムが先にそういう方向に進んだように、日本政府も、日本の教科書も、アジアの明るい未来のために考え、努力すべきではないか。ところが、むしろ現状では、その明るい未来が来る日を妨げているのではないかという気がするのです。

私は先ほど金大中さんの話を少ししましたが、金大中大統領が1998年に日本の大衆文化を大々的に受け入れるという政策を打ち出します。そのときに、韓日文化交流諮問委員会とかいうものが作られたのですが、私に文化・観光部の長官から電話がかかってきて、その責任者になってくれというのです。しかし、私には何をするためにこの委員会を作るのかわからない。私は政治とは関係のない人間だからとあって、一旦は逃げたんです。でも、2、3日したらまた電話がかかってきて、今日、金大中さんに来てほしいというのです。それで、長官といっしょに金大中大統領と来て話をいたしました。私は金大中さんの政治的な誤りもいろいろわかっているし、見解を異にすることもありますが、金大中さんが文化の問題、日韓の間の文化の交流問題について持っていた考えはすばらしかったと思います。彼はこういわれたのです。

「今、日本の大衆文化は非常に発達している。だからわれわれが開放すれば、日本の大衆文化の市場になる、マーケットになる可能性があるかもしれない」

こう前置きして、彼は続けました。

「しかし歴史を考えてみれば、日韓両国の間で、時には文化的に韓国の方が優位に立ったことも過去にはあるではないか。日本が明治以降において優位に立ったとしても、それはそれで認めればいいではないか。文化とはそんなものだ。時には一方が優位に立ち、時にはもう一方が優位に立つ。そうして学び合いながらお互いに発展していけばいい。今、われわれが開

放することによって、日本の大衆文化が入ってきて、韓国がそのマーケットになり、経済的には損だというような考え方があられるかもしれない。しかし、それにこだわってはいは新しい東アジアをつくることはできない」

そうおっしゃったのです。それを聞いて、私は金大中さんに、「それじゃあ、委員長を引き受けます」といったのです。それで、具体的にどんなことをしたか、詳しく申し上げようとは思いませんが、そういった前向きの姿勢がわれわれには必要です。あまり過去のことに囚われないで、あまり恐れを抱かずに、どんどん前に進むべきだということを、若い皆さんの前では申し上げたいと思います。ともあれ、こうして韓国は文化開放の歩みを大々的に歩み出すことになります。しかし、2001年になって、歴史教科書問題が起きて挫折しなければならなかった。そのとき、また自分の話になって恐縮なのですが、私はKBS、韓国の国営といますか、日本でいうとNHKのようなものの理事長をしていました。スタッフたちというのは、日本に対する考え方でそれほど自由ではありませんでした。それで、私が何といったかといいますと、こんな歴史教科書問題が起こっているような時にこそ、日本関係に対するいわば肯定的なプログラムをどんどん採用するよにといいました。ニュース担当者には、こんなときこそ、空港にいて、続々とやって来る日本人観光客を写すべきだといったのです。1990年代の初めまでは、教科書問題のようなことが起こったとき、日本の観光客がタクシーに乗ろうとすると、乗車拒否をするというような、険悪な状況になりました。すくなくともそういう状態は作ってはならないと、私は考えたのです。政府間ではいろいろな問題があるだろう。政治家というのは、先ほどもいいましたように、非常に近視眼的な歴史的認識しかもっていない。しかし、両国の市民の心を引き離してはならない。だから、歴史教科書問題があっても、日本人は自由に韓国にやってくるのだということを示すために、空港にいて日本人観光客の姿でもとる方がいいとい

韓国現代史と日本

ったのです。そのとき、あの『新しい歴史教科書』は、結局、0.039%しか採用されなかったのです。しかし、韓国で反対キャンペーンをやっていた人たちは、0.039%に過ぎないから、もういいとはいえない。今まで盛んに反対してきて、掌を返すようにものは言えないので、黙っているんです。すると秋に入って、日本の学生が韓国に修学旅行に来る季節になったけれど、危険だから、修学旅行を取りやめるといふ動きが出てきた。それで私は委員会を招集して、声明を出すことにしたのです。もう教科書問題は終わった、と。政府がはっきりと言えないから、私たちの委員会が言い出そうと考えたのです。KBSにも関係していましたから、日本のテレビ局もみんな呼んで、これをニュースに出してもらうようにした。日本の修学旅行の学生たちがみんな来られるようにしましょう、そのことが韓国の利益にもなる。経済的な利益だけじゃない、日本の若者に韓国の文化を知ってもらう。両国関係にいろいろな問題が起こっても乗り越えるような国民の力を示すべきだといったのです。

【成熟した市民としての理解と交流に向けて】

今回また、教科書、靖国、そして領土問題と難しい局面が出てきましたが、なんとか乗り切らなくてはならない。この5月に大江健三郎さんが向こうに行って講演をされます。私はそれを非常に喜んでいます。どんなことがあっても変わらない市民レベルの交わりを続けていくべきです。そしてできれば、政治家たちも長い目で歴史を見る目を養ってほしい。日韓の間に過去のような時代は、もう戻って来ないし、戻って来させてはならない。それは両国の利益のためにならない。両国の間に新しい関係をどんどん意識的に作っていかなければならない。それで、たとえば、日本で重要な美術展覧会があると、東京、京都、あるいは大阪、名古屋、そして福岡まで移動するのですが、それがかならず釜山、ソウルにまでやって来るよ

うにする。韓国での展覧会も、今度は逆のコースをとって、東京までいくようにする、そんな時代を作っていかなければならないと思うのです。これはわれわれの義務ではないでしょうか。

それにもかかわらず、最近、非常に淋しいことがあります。日中韓の三国の政治的リーダーたちがみんな戦後生まれです。皆さんも戦後生まれだからよく考えておいて下さい。金大中さんという人は日本語ができる世代のリーダーでした。人に言えないようなずいぶん辛い目にも遭っています。しかし、彼がその辛い時代を反省しながら、新しいアジアはどうあるべきかということを真剣に考えた世代であるのに対して、遺憾ながら、今のリーダーたちは過去を知らない世代です。そして教科書で教わったのか、どこかで読んだものに、何か奇妙に囚われている世代です。過去にそういうことがあったからこそ、われわれは過去のごとき時代を作ってはならないのに、それが理解できない人たちのような気がしてなりません。政治家の想像力のスパンは、思いのほか短いから、問題を解決するより、問題を作ってしまう。今年も解放、戦後60年の年です。しかも日韓条約締結40年の年です。いろんな節目の年であるにもかかわらず、歴史教科書問題や、領土問題でまたぶつかっています。こんな愚かなことを繰り返さないで、どうか前向きになって欲しい。懐古的になるよりは、前の方に向かって欲しい。しかし、繰り返しますが、政府、政治をする人々の想像力は実に短く、長い歴史が見られない。それは政治家の背負わざるを得ない宿命的な欠点かもしれません。次の選挙のことが頭から離れませんからね。ヨーロッパにおいてヨーロッパ共通の歴史教科書を生み出したのは、市民の良識によってでした。このことをわれわれはもう一度思い出しましょう。われわれは市民としての役割を果たしながら、政治家が衝突してもわれわれは衝突しない。そのときこそわれわれがますます手を握りあわなければならないときです。東アジア共通の歴史教科書を、われわれの良識で作りに上げな

韓国現代史と日本

ればならないのです。われわれは新たな未来の歴史を生み出すべく、東アジアの新しい市民の時代へと出発しようではないか。こういうことを訴えながらお話をして終わらせていただきたいと思います。

どうも、ご静聴くださって、ありがとうございました。